

Red Data Book of Wakayama Prefecture

1

哺
乳
類

哺乳類の概要

細田 徹治

今回の改訂事業を進めるにあたって、特に、ネズミ類やモグラ類等、小型哺乳類の生息情報が不足していることが課題であった。2001年に初版が、2012年に改訂版が出版されたが、聞き取り調査による情報をもとに得られた資料に基づくところが大きかった。2012年度の改訂版作成の際には、コウモリ類を中心に現地調査を試みた結果、クロホオヒゲコウモリやノレンコウモリの生息が確認されたが、モグラ類、ネズミ類等、小型哺乳類の情報は少なかった。その理由は、他の生物種とは異なりハツカネズミ、クマネズミ、ドブネズミの家鼠以外の野生哺乳類は全て環境省の捕獲許可が必要であることや、研究者が少ないことから、生息情報を収集することが難しいことにある。

そこで、モグラ・ネズミ類を含めた和歌山県の哺乳類について、レッドリスト作成の基礎資料を得る目的で、2016年度から文献・標本調査及び現地調査を行い、得られた情報のデータベース化を図った(清水ら, 2020)。なお、文献・標本調査は、クジラ類は除外した。文献調査は、論文、報告書、市町村史(誌)等を対象とし、それらの中から種が特定され、かつ確認場所の明らかなものを記録した。現地調査は、小型哺乳類の捕獲調査、中・大型哺乳類を対象に自動撮影カメラによる調査、これらの調査と併せて目撃や鳴き声、糞・食痕・足跡等の痕跡の確認を行った。

その結果、和歌山県では7目20科52種の記録が確認された。そのうち3種(オオカミ、ニホンカワウソ、ニホンアシカ)は絶滅種であり、10種(タイワンザル、ドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミ、ヌートリア、クリハラリス、アライグマ、シベリアイタチ、ハクビシン、タイワンジカ)は外来種である。これらの外来種のうち、和歌山県の外来種リスト(2019)では、ドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミの3種は国内への移入年代が明治時代以前にさかのぼるという理由で除外しているが、清水らは、環境省の外来種リストに準拠して記録している(2020)。

今回の改訂版において、オオカミ、ニホンカワウソの他に新たに海棲哺乳類のニホンアシカを絶滅種に加えた。その理由は各論に記しているが、和歌山県における人と野生動物の歴史的な関係を広く周知できると考えたからである。

和歌山県内に生息する陸棲哺乳類は49種である。そのうち、絶滅危惧種として選定されたのが26種であり、県内に生息する哺乳類の約53%が危機的な状況にある。これら26種のうち、11種(約42%)がコウモリ類である。コウモリ類は昆虫類を餌とし、特に、森林性のコウモリは樹洞をねぐらや育仔の場としている。近年、森林内の下層植生がニホンジカに食害され、餌となる昆虫類が減少していることや、伐採等により森林環境の悪化が進んでいることが影響している。

ニホンカモシカは、国の特別天然記念物に指定されている。和歌山県では、2000年以降に、148個体の滅失個体が報告されている。これらの死亡原因は特定できない場合が多いが、防獣ネットに絡まって窒息死したと思われるものや皮膚病(疥癬症)等に罹患した個体も複数確認されていることから、今後、個体数が急激に減少する可能性は否定できない。また、激増しているニホンジカとの競合も懸案事項である。

アカギツネは、2001年版及び2012年版レッドデータブック作成時には、聞き取り調査において特に取り上げなければならないような状況ではなかった。しかし、今回の聞き取り調査において、「かつては生息したが最近は見なくなった」という証言が多く得られた。また、自動撮影カメラでの撮影頻度もタヌキやアナグマに比べて極端に少ない。

紀伊半島のツキノワグマは、環境省では「絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)」、和歌山県では、2001年版、2012年版ともに絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN) に選定していた。その背景として、1980年代には紀伊半島3県で180頭というきわめて危機的な生息数が算出されたことに鑑み、1994年から狩猟・捕獲自粛の措置を継続し、生息数の回復を待っていた。近年、ツキノワグマの目撃情報が増加傾向にあり、生息数の回復及び生息域の拡大が予想されるため、絶滅危惧Ⅱ類にランクダウンとした。しかし、本種の生息数については1994年以降調査がなされていないことから、和歌山県、奈良県、三重県にまたがった紀伊半島における本種の生息状況を早急に把握する必要がある。

自然環境の悪化はいうまでもなく、外来種の増加にも注視しなければならない。アライグマ (特定外来生物) 及びハクビシンは生息数が増加し、分布域も拡大している。両種は雑食性であり、農作物の食害、在来哺乳類との競合、小鳥の卵や幼鳥を捕食する等、多くの被害が報告されている。友ヶ島や和歌山市内に生息するクリハラリスの分布拡大によるニホンリスとの競合や、タイワンジカが本土へ生息域を拡大することによるニホンジカとの遺伝子汚染等も懸念される場所である。これらについては、被害範囲が少ない段階での迅速な対策が望まれる。

なお、今回の改訂にあたり、各種の解説において、標準和名・学名は川田ら (2021) に、目・科・属・種の配列は Ohdachi *et al.* (2015) に準拠した。また、各論であげた生息確認記録の箇所数は、実際の確認地点数ではなく、大字 (おおあざ) 単位で集計した数値である。

(参考文献)

- 1 川田伸一郎・岩佐真宏・福井 大・新宅勇太・天野雅男・下稲葉さやか・樽 創・姉崎智子・鈴木 聡・押田龍夫・横畑泰志. 2021. 世界哺乳類標準和名リスト 2021年度版. <https://www.mammalogy.jp/list/index.html> (2021年12月17日参照)
- 2 Ohdachi S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Hukui & T. Saitoh. 2015. The Wild Mammals of Japan. Second Edition. 506pp. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
- 3 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊: 1-21.
- 4 和歌山県. 2019. 和歌山県の外来種リスト. 89pp. 和歌山.

● 絶滅 (EX)

オオカミ
ニホンカワウソ
ニホンアシカ

● 絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)

ヒメヒミズ
モリアブラコウモリ
ニホンウサギコウモリ
ノレンコウモリ
クロホオヒゲコウモリ

● 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

カワネズミ
ヒナコウモリ
テングコウモリ
ヤチネズミ
ニホンモモンガ
ツキノワグマ

● 準絶滅危惧 (NT)

キクガシラコウモリ
コキクガシラコウモリ
モモジロコウモリ
ユビナガコウモリ
ヤマネ
カヤネズミ
ニホンリス
アカギツネ
ニホンカモシカ

● 情報不足 (DD)

ミズラモグラ
コテングコウモリ
スミスネズミ

オオカミ *Canis lupus* Linnaeus, 1758 食肉目 イヌ科

県カテゴリー	絶滅 (EX)	旧県	2012	絶滅 (EX)	国	絶滅 (EX)
--------	---------	----	------	---------	---	---------

亜種ニホンオオカミ *C. l. hodophilax* は、本州、四国、九州に分布したが、1905年の奈良県東吉野村での捕獲を最後に、100年以上にわたって記録がない。和歌山県では、紀州藩時代（1730年代）の産物帳に記録があり、また、1904年か1905年に奈良県十津川村で捕獲されたとされる個体の剥製が県立自然博物館に、頭骨が和歌山大学教育学部に保管されている。1900年代初頭までは紀伊山地に生存していたこ



選定理由 とは間違いがない。

絶滅の原因としては、狩猟圧の増大や伝染病の蔓延、森林開発の影響等があげられている。その森林開発に関わる資料として、日本の人口推移をみると、1872年に3,480万人であったのが、1920年には5,547万人に、約50年で1.5倍強の増加であった。その間、多くの人々が山間に田畑を開墾し、害獣となる猪鹿を駆除していったことは想像に難くない。これらの行為が、本種の生息地と餌の減少を招き、絶滅に至ったと思われる。

亜種ニホンオオカミは大陸に広く分布するオオカミに比べて小型・短肢とされる。なお、北海道産は亜種エゾオオカミ *C. l. hattai* に分類されている。

執筆者（清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁）

**参考文献
・情報**

- 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁, 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊: 1-21.
- 総理府統計局. 1964. 第15回日本統計年鑑 1 人口の推移.
https://www.nikkei.co.jp/needs/senzen/contents/pdf/001_1_1.pdf (2021年6月24日参照)
写真: 桑原英文撮影 (和歌山大学教育学部所蔵標本)

ニホンカワウソ *Lutra nippon* Imaizumi & Yoshiyuki, 1989 食肉目 イタチ科

県カテゴリー	絶滅 (EX)	旧県	2012	絶滅 (EX)	国	絶滅 (EX)
--------	---------	----	------	---------	---	---------

本種は、本州、四国、九州、奄岐、対馬に分布したが、1979年の高知県須崎市における目撃情報が最後の記録である。和歌山県では、1925年に15頭捕獲の狩猟統計が残っており、また、和歌山市友ヶ島で1955年に死体1頭、1954年と1955年に足跡の確認記録があり、本州では最も遅くまで生息が確認できた県である。



選定理由

上述のように狩猟獣であったことから、毛皮採取を目的とした強い捕獲圧がかかっていた。1928年以降は狩猟対象からは除外され、1965年には国の特別天然記念物に指定されているが、個体数の回復は叶わなかった。その原因は、指定後も本種の生息環境の再生に取り組まなかったことに加え、漁網等による誤捕獲防止のための対策を講じなかったことによると思われる。

主生息域を山地とするオオカミと水辺である本種の絶滅は、どちらも各々の生態系において最大の肉食獣であったことを思うと、日本列島の自然環境の劣化を象徴していると言えよう。

本種を大陸産の亜種 *L. lutra nippon* とする見解もある。

執筆者（清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁）

参考文献
・情報

- 1 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 2 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊: 1-21.
- 写真: 清水善吉撮影 (三重県総合博物館所蔵標本)

ニホンアシカ <i>Zalophus japonicus</i> (Peter, 1866) 食肉目 アシカ科						
県カテゴリー	絶滅 (EX)	旧県	2012	-	国	絶滅危惧 I A 類 (CR)

選定理由

本種は、千島列島から九州の沿岸部に分布したが、1975年の島根県竹島における確認以降、全国的に記録がない。

和歌山県では、由良町海鹿島で1709年から1878年までの間に、多いときで250頭を数える目撃記録がある。このような状況を維持できたのは、同島が紀州藩主の御猟場として管理下に置かれていたためである。しかし、明治政府となり、藩体制の消滅にあわせて急減、絶滅した。おそらく、自由な渡島が可能になったことにより、強い狩猟圧が加わったものと思われる。

全国的にも、毛皮や油を目的とした乱獲により各地の生息地が消滅したとされる。

執筆者 (清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁)



参考文献
・情報

- 1 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 2 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊: 1-21.
- 写真: 和田恵次提供 (奈良女子大学所蔵標本)

ヒメヒミズ <i>Dymecodon pilirostris</i> True, 1886 トガリネズミ形目 モグラ科						
県カテゴリー	絶滅危惧 I 類 (CR + EN)	旧県	2012	絶滅危惧 II 類 (VU)	国	-

選定理由

本種は、本州、四国、九州に分布する日本固有種である。和歌山県では、新宮市、古座川町各1、計1市1町2箇所での生息の記録があり、今回の改訂にともなう調査でもこの2箇所での生息を確認した。また、新たに田辺市の1箇所での生息が確認できた。しかしながら、新産地の確認は30年ぶりであり、今後も生息地が大幅に増加するとは考えにくい。

競合種ヒミズとの間で標高により棲み分けているケースもみられるが、最高地点が1,400 mに届かない和歌山県では認められない。和歌山県既知3箇所の環境は、岩場やガレ場に限定されていることから、ヒミズとの競合の結果、土壌の発達の良い環境に閉じこめられていると考えられる。和歌山県におけるヒメヒミズの生息状況は、ヒミズ生息域のなかにかろうじて残存している状況である。このような残存個体群の保護は、人為による影響での減少ではないだけに難しい面もあるが、まずは既知の生息地を厳重に守ることである。

執筆者 (清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁)



参考文献
・情報

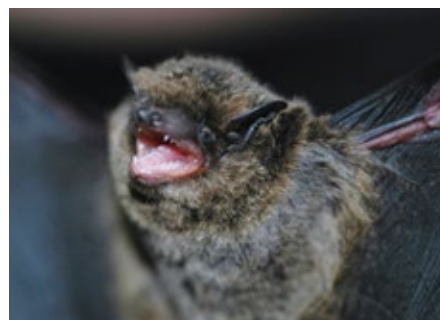
- 1 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 2 清水善吉. 2021. 和歌山県レッドデータブック 2021 調査の追加記録—とくに、ヒメヒミズとスミスネズミの生息環境—. 南紀生物, 63 (2): 159-163.
 - 3 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊: 1-21.
- 写真: 清水善吉撮影

モリアブラコウモリ *Pipistrellus endoi* Imaizumi, 1959 翼手目 ヒナコウモリ科

県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)	旧県	2012	情報不足 (DD)	国	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
--------	------------------	----	------	-----------	---	-------------

本種は、本州と四国に分布する日本固有種であるが、確認記録はきわめて少ない。和歌山県でも、田辺市1箇所ですべて1頭の生息記録があるに過ぎない。

日中のねぐらは樹洞であり、原生林に生息するとされていることから、樹洞のあるような大木の原生林を伐採してしまったことが減少の原因であろう。和歌山県唯一の生息確認地が大塔山黒蔵谷であること



選定理由 とは、その考えと矛盾しない。

今後は、原生林伐採を行わないことはもちろん、人工林であっても樹洞があるような大木は一部を残置する等の施工方法が望まれる。また、ニホンジカの個体数増加に伴う林床植物の消滅は、餌となる昆虫類の減少を招いている可能性があり、コウモリ類の生息にも大きな影響を与えていると思われる。

ねぐらとして洞穴を利用しないことから生息確認はきわめて困難であり、調査にあたってはカスミ網等を用いた捕獲を地道に継続するしかない。

執筆者 (清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁)

参考文献
・情報

- 1 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 2 福井 大. 2016. 和歌山県におけるコウモリ類の記録. 南紀生物, 58 (2) : 162-171.
 - 3 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊 : 1-21.
- 写真 : 原田正史撮影

ニホンウサギコウモリ *Plecotus sacrimontis* G. M. Allen, 1908 翼手目 ヒナコウモリ科

県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)	旧県	2012	絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)	国	絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)
--------	------------------	----	------	------------------	---	---------------------

本種は、北海道、本州 (中国地方を除く)、四国に分布する。和歌山県では、橋本市1・紀の川市2、高野町3、計2市1町6箇所で生息の記録がある。各箇所の確認個体数は、17頭と5頭が各1、1頭が4箇所である。



選定理由

日中のねぐらとして樹洞や洞穴、ときには家屋を利用することもある。和歌山県における生息確認は全て洞穴内であるので、奥山の隧道等を精査すれば新たな生息地が見つかる可能性がある。また、民家周辺に棲みついたコウモリ情報を収集し、現地調査を行って種の確定作業を実施することも必要と思われる。

洞穴をねぐらとするコウモリ類全般に当てはまるが、安全対策のための素堀隧道へのモルタル吹きつけや洞口の閉鎖にあたっては注意が必要である。工事の際には、計画立案時にコウモリ生息の調査を行い、生息が確認できた場合は計画の撤回を検討し、変更困難な時には適切な保全工法を採用しなければならない。また、既知産地の情報を事業部署に日頃から周知しておくことも大事である。

執筆者 (清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁)

参考文献
・情報

- 1 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 2 福井 大. 2016. 和歌山県におけるコウモリ類の記録. 南紀生物, 58 (2) : 162-171.

参考文献
・情報

- 3 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊: 1-21.
写真: 清水善吉撮影 (県外撮影)

ノレンコウモリ <i>Myotis bombinus</i> Thomas, 1906 翼手目 ヒナコウモリ科						
県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)	旧県	2012	絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)	国	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

本種は、北海道、本州、四国、九州に分布するが、確認記録は少ない。和歌山県では、田辺市1・新宮市2、高野町2・古座川町1、計2市2町6箇所で見息の記録がある。各箇所の個体数は、1箇所まで5頭、5箇所は1頭の確認である。確認箇所数及び確認個体数がきわめて少ない。



選定理由

日中のねぐらは洞穴であるが、樹洞も利用する。樹洞を利用したねぐらの確認は困難であるが、洞穴のより詳細な調査は今後必要である。既知の6箇所のうち4箇所は洞穴での確認であり、奥山の林道や廃道に残された隧道を丹念に探せば新たな生息地が見つかる可能性がある。

また、既知産地については、生息情報の周知とともに、コウモリ類に悪影響を及ぼさない方法でモニタリングを実施していくことが望ましい。

執筆者 (清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁)

参考文献
・情報

- 1 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
2 福井 大. 2016. 和歌山県におけるコウモリ類の記録. 南紀生物, 58 (2): 162-171.
3 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊: 1-21.
写真: 細田徹治撮影

クロホオヒゲコウモリ <i>Myotis pruinosus</i> Yoshiyuki, 1971 翼手目 ヒナコウモリ科						
県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)	旧県	2012	絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)	国	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

本種は、本州、四国、九州に分布する日本固有種である。本県では、田辺市の2箇所でのみ生息の記録があり、確認個体数は5頭以下である。



選定理由

ブナ林の下部から照葉樹林に生息するとされており、これらの原生林が伐採・人工林化されるのにもない、減少していったものと思われる。既知2箇所の生息地は、護摩壇山森林公園内及び大塔山黒蔵谷であり、和歌山県内においては比較的原生林が残存している地域である。これ以上の原生林伐採を避けることは、本種保全上も必須である。

昼間の休息場所は樹洞とされているが、洞穴内での確認例もあることから、原生林が残っている地域にある隧道等の調査を丹念に行えば新たな生息地が見つかる可能性がある。なお、本種の同定 (種の特定) は難しく、調査にあたっては、いったんは捕獲して精査する必要がある。

執筆者 (清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁)

参考文献
・情報

- 1 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
2 福井 大. 2016. 和歌山県におけるコウモリ類の記録. 南紀生物, 58 (2): 162-171.
3 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊: 1-21.

参考文献
・情報

- 4 清水善吉・佐野 明. 2021. 三重県におけるクロホオヒゲコウモリの記録—清水（2007）でヒメホオヒゲコウモリとされた個体の再検討—. 三重自然誌, (17) : 72-73.
写真：原田正史撮影

カワネズミ	<i>Chimarrogale platycephalus</i> (Temminck, 1842)	トガリネズミ形目	トガリネズミ科			
県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	旧県	2012	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	国	—

選定理由

本種は、本州、九州に分布する日本固有種である。橋本市1・新宮市1・田辺市3、紀美野町1・古座川町1、計3市2町7箇所で見られる。紀中地域での記録を欠くが、和歌山県の全域が分布域とみられる。

名前のとおり、河川の中上流域を生息環境としており、水辺から大きく離れることはない。そのため、河川環境の悪化は本種に甚大な影響を及ぼす。例えば、河川工事等の濁水により下流側の水生昆虫が減少することにより餌不足となり、本種は消滅してしまうという指摘もある。また、岸辺の土中や巨岩の下に巣をつくることから、コンクリート護岸や流路の直線化など、河川環境の単調化も本種の減少につながる。

河川工事等に際しては、適切な濁水対策を講じるとともに、河川内の岩石等の持ち出しを避けることが重要である。

執筆者（清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁）



参考文献
・情報

- 1 阿部 永. 2003. カワネズミの捕獲, 生息環境および活動. 哺乳類科学, 43 : 51-65.
2 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
3 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊 : 1-21.
写真：清水善吉撮影 (県外撮影)

ヒナコウモリ	<i>Vespertilio sinensis</i> (Peters, 1880)	翼手目	ヒナコウモリ科			
県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	旧県	2012	情報不足 (DD)	国	—

選定理由

本種は、北海道、本州、四国、九州に分布する。和歌山県では、橋本市1・田辺市1、九度山町1・有田川町1、計2市2町4箇所で見られる。直近の確認である有田川町の1箇所は、橋梁の隙間を日中のねぐらとしており、700頭を超える大群となることもある。他の箇所は1ないしは2頭の確認である。

有田川町の生息地については、環境改変のないように留意する必要がある、定期的なモニタリングを実施していくことも重要である。最近では橋桁の耐震補強の工事が行われることも多いので、行政機関への情報提供は急務である。

日中のねぐらは樹洞が基本であるが、人工構造物を利用することも多いので、出巢時の目撃情報を募ることも生息状況の把握には効果的である。情報が得られたら、現地調査を行い、種の確定をする作業が必要となる。

執筆者（清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁）



参考文献
・情報

- 1 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
2 福井 大. 2016. 和歌山県におけるコウモリ類の記録. 南紀生物, 58 (2) : 162-171.
3 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊 : 1-21.
写真：細田徹治撮影

テングコウモリ *Murina hilgendorfi* (Peters, 1880) 翼手目 ヒナコウモリ科

県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	旧県	2012	情報不足 (DD)	国	-
--------	-------------	----	------	-----------	---	---

本種は、北海道、本州、四国、九州に分布する日本固有種である。和歌山県では、御坊市1・田辺市2・新宮市1、高野町2・古座川町1、計3市2町の7箇所生息の記録がある。また、各箇所での確認個体数は1ないしは2頭であり、生息範囲は和歌山県の全域に及んでいるが、確認事例、確認個体数は少ない。



選定理由 日中のねぐらは樹洞や洞穴であるが、木の茂みや家屋内で見つかった例もある。和歌山県では、洞穴で確認された記録が多く、廃道となったトンネルがねぐらとなっていることもある。そのようなトンネルは、安全対策上の理由で閉鎖されるため、工事にあたっては本種を含めた洞穴棲コウモリの保全対策が求められる。人の侵入はできないが、コウモリの出入りが可能な柵（バット・ゲートと呼ばれる）の設置が各地で進んでおり、和歌山県においても採用していくべきである。また、ねぐらとなる樹洞のできるような大木は極力残すことも重要である。

執筆者（清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁）

参考文献・情報

- 1 阿部 永（監）. 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 2 福井 大. 2016. 和歌山県におけるコウモリ類の記録. 南紀生物, 58 (2): 162-171.
 - 3 コウモリの会（編）. 2011. コウモリ識別ハンドブック 改訂版. 88pp. 文一総合出版, 東京.
 - 4 清水善吉. 2015. 御浜町の茶畑でテングコウモリを確認. 自然誌だより, (104): 8.
 - 5 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊: 1-21.
- 写真: 清水善吉撮影 (県外撮影)

ヤチネズミ *Craseomys andersoni* (Thomas, 1905) 齧歯目 キヌゲネズミ科

県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	旧県	2012	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	国	-
--------	-------------	----	------	-------------	---	---

本種は、本州中部以北および紀伊半島に分布する。両分布地間に位置する鈴鹿・布引山地には生息せず、紀伊山地は本種の隔離分布地である。和歌山県での生息は、田辺市3・新宮市4、白浜町1・那智勝浦町1・古座川町2、計2市3町11箇所での記録がある。紀南の山地にのみ分布し、生息環境はきわめて限定的である。



選定理由 その生息環境は、優占樹種は問わないが、鬱蒼とした森林内の谷沿いの岩の多い場所である。しかしながら、このような場所であれば必ず生息するというわけではなく、他にも分布の限定要因があると思われる。狭い分布域の限られた環境に生息していることから、生息地の改変は即、地域絶滅につながる。

治山事業や林道敷設にあたっては事前調査を実施し、本種の生息が確認できた場合は計画の見直し等も必要である。また、和歌山県内における生息地の把握を継続的に進めていくべきである。

なお、本種の分類は阿部（2008）および Iwasa *et al.*（2022）に従った。

執筆者（清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁）

参考文献・情報

- 1 阿部 永（監）. 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.

参考文献
・情報

- Iwasa, A. M., Kaneko, Y. & Kimura, Y. 2022. Evidence of late root formation of molars in Anderson's red-backed vole, *Eothenomys andersoni* (Thomas, 1905) (Cricetidae, Rodentia), and arguments for its genetic allocation. *Zookeys*, 1123 : 187-204.
- 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. *南紀生物*, 62 (2) 別冊 : 1-21.
写真：清水善吉撮影（県外撮影）

ニホンモモンガ *Pteromys momonga* Temminck, 1844 齧歯目 リス科

県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	旧県	2012	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	国	—
--------	-------------	----	------	-------------	---	---

本種は、本州、四国、九州に分布する日本固有種である。和歌山県では、橋本市1・田辺市3、紀美野町・高野町・古座川町で各1、計2市3町7箇所で生息の記録がある。紀中地域での記録を欠くが、全県が分布域とみられる。



滑空しながら移動するので、それが可能な森林のみに生息する。植物食であるので、餌条件によって分布が制限されることはないが、日中のねぐらや出

選定理由 産のための巣を樹洞につくることから、大木のある環境が必要となってくる。大木のある場所として真っ先に思いつくのは社寺林であるが、和歌山県では生息の記録がない。社寺林に生息することの多いムササビと競合関係にあり、より小型であることから劣位であるのかもしれない。

最近、木材需要が好転の兆しをみせており、森林伐採の拡大が懸念される。天然林を伐採しないことはもちろん、人工林であっても大径木を一部残すなどの森林施業が望ましい。また、本種の分布・生態に関する記録はきわめて少なく、積極的に調査研究を進める必要がある。

執筆者（清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁）

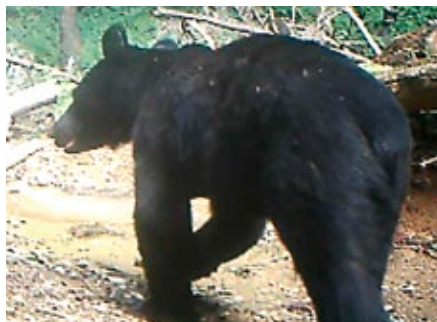
参考文献
・情報

- 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. *南紀生物*, 62 (2) 別冊 : 1-21.
写真：鈴木慶太撮影

ツキノワグマ *Ursus thibetanus* G. Cuvier, 1823 食肉目 クマ科

県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	旧県	2012	絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)	国	絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)
--------	-------------	----	------	------------------	---	---------------------

本種は、本州と四国に分布し、九州では絶滅したとされる。和歌山県では、橋本市・田辺市、かつらぎ町・九度山町・有田川町・日高町・印南町・みなべ町・日高川町・古座川町、北山村の2市8町1村で生息の記録がある。



選定理由 本種はかつて狩猟獣であり、また林業被害を発生することから檻罠による捕獲が積極的に行われていた。その結果、1980~1990年代には紀伊半島3県で180頭というきわめて危機的な個体数が推定された。それを受けて、1994年から狩猟・捕獲自粛の措置を継続しており、近年の目撃情報は個体数の増加及び生息域の拡大を示唆しているため、ランクダウンとなった。

更に、増加を示す情報として猪罠等による誤捕獲が2014~2020年度で計26頭あり（和歌山県資料）、すべて奥山放獣されている。また、人家付近に出没する事例も増えており、

選定理由

人身被害の発生も予想されることから、地域住民への啓発とともに、このようなケースにおける対応のルールを検討する必要がある。そのためには、紀伊半島3県が連携した個体数の把握が緊急の課題である。

執筆者（清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁）

参考文献・情報

- 1 阿部 永（監）. 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 2 環境省（編）. 2014. レッドデータブック2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－1 哺乳類. 132pp. ぎょうせい, 東京.
 - 3 環境省自然環境局生物多様性センター. 2019. 平成30年度（2018年度）中大型哺乳類分布調査 調査報告書 クマ類（ヒグマ・ツキノワグマ）・カモシカ. 67pp. +資料（1-41）. 富士吉田.
 - 4 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62（2）別冊：1-21.
- 写真：細田徹治撮影

キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum* (Schreber, 1774) 翼手目 キクガシラコウモリ科

県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	準絶滅危惧 (NT)	国	-
--------	------------	----	------	------------	---	---

選定理由

本種は、北海道から屋久島まで分布する。和歌山県では、和歌山市1・橋本市2・田辺市6・新宮市2・紀の川市1、高野町4・由良町1・印南町1・みなべ町1・日高川町1・白浜町1・上富田町1・那智勝浦町1・古座川町2、計5市9町の25箇所で生息の記録がある。300頭以上の記録が1箇所、10~100頭が5箇所、その他は1~数頭の確認であり、確認箇所数の割に確認個体数は少ない。



日中のねぐらは洞穴であり、自然洞以外にも山間部の隧道や廃トンネル、廃坑、導水路、炭焼き窯跡等を利用する。更に、廃屋や民家の納屋等を休息場所を選ぶこともあり、ねぐら環境選択の幅は比較的広い。しかしながら、基本は洞穴であり、安全対策上の理由で洞口を閉鎖する場合には、コウモリの出入りが可能なバット・ゲートを設置することが必要である。また、防空壕のように戦争遺跡として観光資源化されている箇所もあるため、コウモリ類の生息環境については入壕規制が必要である。

執筆者（清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁）

参考文献・情報

- 1 阿部 永（監）. 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 2 福井 大. 2016. 和歌山県におけるコウモリ類の記録. 南紀生物, 58（2）：162-171.
 - 3 コウモリの会（編）. 2011. コウモリ識別ハンドブック 改訂版. 88pp. 文一総合出版, 東京.
 - 4 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62（2）別冊：1-21.
- 写真：細田徹治撮影

コキクガシラコウモリ *Rhinolophus cornutus* Temminck, 1834 翼手目 キクガシラコウモリ科

県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	準絶滅危惧 (NT)	国	-
--------	------------	----	------	------------	---	---

選定理由

本種は、北海道から奄美諸島まで分布する。和歌山県では、橋本市1・田辺市2・新宮市1・紀の川市1、九度山町1・日高川町1・那智勝浦町2・古座川町2、計4市4町の11箇所で生息の記録がある。1箇所で300頭以上の記録があるが、他はすべて10頭以下である。



日中のねぐらは洞穴であるが、キクガシラコウモリに比べて外界の影響が及びにくい生息環境を選択

する傾向が認められる。そのため、両端の開口した短い廃トンネルや導水路には生息しない。既知の生息地について、安全対策上の理由で洞口を閉鎖する場合には、コウモリの出入りが可能なバット・ゲートを設置することが必要である。また、保全対策を計画段階から立案することができるように、既知産地の周知を積極的に行うことが必要である。

執筆者（清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁）

参考文献
・情報

- 1 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 2 福井 大. 2016. 和歌山県におけるコウモリ類の記録. 南紀生物, 58 (2) : 162-171.
 - 3 コウモリの会 (編). 2011. コウモリ識別ハンドブック 改訂版. 88pp. 文一総合出版, 東京.
 - 4 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊 : 1-21.
 - 5 清水善吉・寺西敏夫・佐野 明・富田靖男・前田喜四雄. 2004. 三重県のコウモリ洞と生息記録. 三重自然誌, (8/9/10) : 77-90.
- 写真：清水善吉撮影（県外撮影）

モモジロコウモリ *Myotis macrodactylus* (Temminck, 1840) 翼手目 ヒナコウモリ科

県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	準絶滅危惧 (NT)	国	-
--------	------------	----	------	------------	---	---

本種は、北海道、本州、四国、九州、佐渡、対馬、徳之島に分布する。和歌山県では、橋本市1・田辺市3・新宮市3・紀の川市1、高野町4・上富田町1・すさみ町1・古座川町5、計4市4町の19箇所生息の記録がある。各箇所の生息個体数は、1箇所で2,000~3,000頭の大群が記録されているが、他は10頭以上が4箇所あるだけであり、大部分は1~数頭の記録である。生息域は和歌山県の全域に及び、確認箇所も比較的多いが、生息環境は脆弱である。



選定理由

すなわち、日中のねぐらは洞穴であり、自然洞以外にも山間部の隧道や廃トンネル、廃坑、導水路等を利用するが、これらの環境は人為の影響を受けることが多い。安全対策上の理由により廃トンネル等を閉鎖する場合は、コウモリの出入りが可能なバット・ゲートを設置することが必要である。また、工事等の計画段階から保全対策を立案することができるように、既知産地の周知を積極的に行うことが必要である。

執筆者（清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁）

参考文献
・情報

- 1 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 2 福井 大. 2016. 和歌山県におけるコウモリ類の記録. 南紀生物, 58 (2) : 162-171.
 - 3 コウモリの会 (編). 2011. コウモリ識別ハンドブック 改訂版. 88pp. 文一総合出版, 東京.
 - 4 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊 : 1-21.
- 写真：清水善吉撮影（県外撮影）

ユビナガコウモリ *Miniopterus fuliginosus* (Hodgson, 1835) 翼手目 ヒナコウモリ科

県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	準絶滅危惧 (NT)	国	-
--------	------------	----	------	------------	---	---

本種は、本州、四国、九州、佐渡、対馬に分布する。和歌山県では御坊市1・田辺市2・新宮市6・紀の川市1、高野町1・みなべ町1・日高川町1・白浜町1・上富田町1・那智勝浦町1・古座川町2、計4市7町の18箇所で生息の記録がある。各箇所の個体数は、一部に大群の記録があるが、ほとんどは10頭以下である。



日中のねぐらは洞穴内であり、自然洞以外にも山間部の隧道や廃トンネル、廃坑、導水路等を利用することも多い。数百頭以上の大群を形成し、和歌山県においても約5,000頭のねぐら集団が知られている。また、白浜町の千畳敷海食洞は近畿地方における唯一の繁殖洞とされ、30,000頭を超える数の出産・保育集団が確認されている。なお、出産は初夏で、一子である。

安全対策上の理由により廃トンネル等を閉鎖する場合は、コウモリの出入りが可能なバット・ゲートを設置することが必要である。また、千畳敷海食洞については、近畿地方のユビナガコウモリにとってきわめて重要であることから、「ユビナガコウモリの繁殖洞」として白浜町指定の天然記念物となっている。

執筆者（清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁）

参考文献
・情報

- 1 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 2 福井 大. 2016. 和歌山県におけるコウモリ類の記録. 南紀生物, 58 (2): 162-171.
 - 3 コウモリの会 (編). 2011. コウモリ識別ハンドブック 改訂版. 88pp. 文一総合出版, 東京.
 - 4 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊: 1-21.
- 写真: 清水善吉撮影 (県外撮影)

ヤマネ *Glirulus japonicus* (Schinz, 1845) 齧歯目 ヤマネ科

県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	国	-
--------	------------	----	------	-------------	---	---

本種は、本州、四国、九州、隠岐の低山から亜高山帯の森林に生息する。日本固有種で、国の天然記念物に指定されている。夜行性で、主に樹上で活動し、体サイズの割に広い行動圏（メス1.1 ha、オス5.8 ha）を持つ。餌は、果実や昆虫、その他の小動物、小鳥の卵等。冬期に冬眠し、中部地方での冬眠期間は6ヶ月前後に及ぶ。温暖な本県では11月から翌年2月まで冬眠する。一方で、筆者らは、和歌山県内で12月に活動する個体を確認している。



2009~2019年の巣箱調査により、橋本市（巣材と個体）、白馬林道沿い山林（広川町（個体）・日高川町（個体））、日高川町（個体と巣材）、有田川町（個体と巣材）、田辺市黒蔵谷国有林（巣材）及び古座川町の北海道大学和歌山研究林（個体と巣材）にて恒常的な生息を確認した。この他、2016年に田辺市で幼獣の保護記録がある。これらの結果は、本種が和歌山県内全域に安定的に生息していることを示しており、ランクダウンの根拠とした。

一方、紀南地方の高速道路の新設や拡幅工事に加え、紀中山岳地帯を中心に大規模風力

選定理由 発電施設の建設・計画が相次いでおり、生息条件の悪化が危惧される。
執筆者（芝田史仁・清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩）

参考文献・情報

- 1 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 2 芝田史仁・細田徹治・揚妻直樹・鈴木慶太・清水善吉. 2020. 和歌山県内におけるヤマネ *Glirulus japonicus* の生息状況. 南紀生物, 62 (2) : 98-102.
- 3 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊 : 1-21.
写真：清水善吉撮影（県外撮影）

カヤネズミ *Micromys minutus* (Pallas, 1771) 齧歯目 ネズミ科

県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	準絶滅危惧 (NT)	国	-
--------	------------	----	------	------------	---	---

本種は、本州（宮城・新潟以南）、四国、九州、対馬、隠岐島、淡路島等に分布する。和歌山県での生息は、和歌山市・海南市・橋本市各1、田辺市3・新宮市2・紀の川市1、高野町・有田川町・上富田町各1、計6市3町12箇所記録がある。確認箇所は多くないが、分布域は和歌山県の全域に広がる。



選定理由 本種の生態的特徴として、営巣植物としてオギ・ススキ等のイネ科植物を必要とすることであり、それらを組み込んで球状の巣をつくる。これらの植物は、川原や休耕田等に生育することが多く、河川敷の公園化や放棄水田の埋め立て、遷移の進行は本種の生息地を奪ってしまう。また、道路法面の植生に営巣する場合もあることから、その除草管理には配慮し、区画を分けて実施するなどの対策が求められる。

なお、水田のイネに営巣するケースも多いことから、和歌山県内においてもその実態調査が必要である。

執筆者（清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁）

参考文献・情報

- 1 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 2 畠 佐代子. 2015. すぐそこに、カヤネズミ 身近にくらす野生動物を守る方法. 143pp. くもん出版, 東京.
- 3 清水善吉. 2014. 三重県におけるカヤネズミの分布状況. 三重自然誌, (14) : 76-82.
- 4 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊 : 1-21.
写真：細田徹治撮影

ニホンリス *Sciurus lis* Temminck, 1844 齧歯目 リス科

県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	準絶滅危惧 (NT)	国	-
--------	------------	----	------	------------	---	---

本種は、本州、四国、九州に分布する日本固有種である。ただし、中国地方以西には少なく、九州からの確実な記録は近年ない。和歌山県では、和歌山市1・橋本市1・田辺市3、広川町1・有田川町3・日高町・由良町・印南町各1・日高川町4・白浜町1・古座川町1、北山村1、計3市8町1村19箇所生息の記録がある。和歌山市における記録は直川地内で自動撮影されたものであり、紀の川以北にも分布することが判明した。



選定理由 平野から亜高山帯にかけて分布するが、主たる生息地は低山～山地帯のアカマツ林であった。しかしながら、単一樹種による人工林化やマツノザイセンチュウによる大量枯死、遷

移の進行等によりアカマツ林は激減した。最近では、太陽光発電や風力発電施設の建設が相次いでおり、生息地をさらに減少させている。また、各地で見られる不必要なほど広い林・農道の敷設も本種の生息地を分断し、輪禍による個体数減少を誘発している。

選定理由 なお、クリハラリスが和歌山市で野生化していることから、分布拡大によりニホンリスの生活を圧迫することが懸念される。クリハラリスは特定外来生物でもあり、その駆除は緊急の課題である。

執筆者（清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁）

参考文献・情報

- 1 阿部 永（監）. 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 2 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊: 1-21.

写真: 内藤麻子提供

アカギツネ *Vulpes vulpes* (Linnaeus, 1758) 食肉目 イヌ科

県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	-	国	-
--------	------------	----	------	---	---	---

本種は、北海道、本州、四国、九州等に分布する。和歌山県では、橋本市1・田辺市3・紀の川市1・岩出市1、かつらぎ町3・有田川町4・日高川町2・上富田町1、計4市4町16箇所で生息の記録がある。なお、岩出市における記録は、中島地内の県道134号線付近においてメス1頭（死体）が拾得されたものであり（和歌山県立自然博物館資料）、紀の川以北にも分布することが判明した。



選定理由 一方、紀南地方での生息記録は確認できないことから、分布の空白域となっている可能性がある。新宮市熊野川町嶋津地内での聞き取りでは、かつてはいたが最近は見なくなったという証言も得られており、何らかの原因で急減したことを示唆している。その原因のひとつとして、疥癬症の蔓延が考えられる。タヌキが罹患して衰弱している例は多く確認されており、同じイヌ科に属する本種も少なからず影響を受けたと思われる。また、中山間地が主たる生息地である本種にとって、同地域の人口減少と耕作地の消滅も一因かもしれない。狩猟獣であるが、さして需要があるとも思えず、また減少傾向にあることから、狩猟獣指定を解除することが妥当である。

執筆者（清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁）

参考文献・情報

- 1 阿部 永（監）. 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 2 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊: 1-21.

写真: 中村 進提供

ニホンカモシカ *Capricornis crispus* (Temminck, 1836) 偶蹄目 ウシ科

県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	旧県	2012	準絶滅危惧 (NT)	国	絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)
--------	------------	----	------	------------	---	---------------------

選定理由 本種は、本州、四国、九州に分布する日本固有種である。1955年に国の特別天然記念物に指定され、5年間隔で生息状況のモニタリング調査が行われている。それによると分布域は拡大傾向にあることが認められ、農林業被害が発生していることから、一部では特別捕獲も実施している。

和歌山県では、橋本市・田辺市・新宮市・紀美野町・かつらぎ町・九度山町・高野町・広川町・有田



川町・みなべ町・日高川町・白浜町・すさみ町・那智勝浦町・古座川町・串本町、北山村の3市13町1村で生息の記録がある。紀の川以北での確認はない。特別天然記念物指定動物であるので、衰弱個体が保護される機会も多いが、懸念されるのは滅失（死亡）個体発見の数である。2000年以降だけでも148頭の確認があるのは、輪禍による死亡例をのぞけば、他の大型野生哺乳類では例がないであろう。

選定理由

死亡原因は不明な場合が多いが、疥癬症等の皮膚病等に罹患した個体も確認されていることから、今後、急激に減少する可能性も否定できない。また、激増しているニホンジカとの競合も懸案事項である。

執筆者（清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁）

参考文献・情報

- 1 阿部 永（監）. 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 2 三重県教育委員会・奈良県教育委員会・和歌山県教育委員会. 2010. 紀伊山地カモシカ保護地域第4回特別調査報告書. 219pp. 三重県教育委員会・奈良県教育委員会・和歌山県教育委員会.
 - 3 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊: 1-21.
- 写真: 丸谷榮彦提供

ミズラモグラ <i>Oreoscaptor mizura</i> (Günther, 1880) トガリネズミ形目 モグラ科						
県カテゴリ	情報不足 (DD)	旧県	2012	情報不足 (DD)	国	準絶滅危惧 (NT)

本種は、本州のみに分布する日本固有種である。和歌山県では、1971年に橋本市矢倉脇での記録が唯一であったが、2021年に同市彦谷で50年ぶりに死体1頭が拾得された。

50年前の確認地点の環境は不明であるが（現在はスギ人工林）、彦谷の拾得地点の植生はスギ・ヒノキの人工林であり、低木層・林床植物は貧弱である。

選定理由

本種は自然林や地形の複雑な山地に限定生息するという指摘もあるが、今回の確認地点はどちらにも該当せず、また、本州各地からの報告も限定環境下での生息には否定的な事例が多い。調査の進展によりランク外となる可能性もあることから、まずは生息状況を把握することが必要である。

なお、本種はモグラであるが、地表での行動も比較的多く行うとされており、墜落缶を用いた調査が比較的有效である。また、モグラの死体を発見したときに「拾う人材」の確保も、本種の生息状況解明には不可欠である。

執筆者（清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁）



参考文献・情報

- 1 阿部 永（監）. 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
 - 2 逸見翔太・鈴木慶太・清水善吉. 2021. 和歌山県でミズラモグラを50年ぶりに確認. 南紀生物, 63 (2): 176-178.
 - 3 環境省（編）. 2014. レッドデータブック2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－1 哺乳類. 132pp. ぎょうせい, 東京.
 - 4 相良直彦・上田俊穂・西田富士夫・正井俊郎. 2008. 滋賀県朽木におけるミズラモグラの存在, とくに低標高の地における生息について. 哺乳類科学, 48: 31-38.
 - 5 樽野博幸. 1978. 近畿地方にも, ミズラモグラがいた! Natuer Study 7号 6ページの記事の訂正とおよび. Nature Study, 24 (12): 7-8.
- 写真: 清水善吉撮影 (県外撮影)

コテングコウモリ *Murina ussuriensis* Ognev, 1913 翼手目 ヒナコウモリ科

県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	-	国	-
--------	-----------	----	------	---	---	---

本種は、日本列島に広く分布するが、西日本における記録は少ない。本県においても由良町で1頭の記録があるだけであり、その標本は京都大学総合博物館に収蔵されている。

選定理由

日中のねぐらは基本的に樹洞であるが、木の茂みや樹皮の隙間、洞穴内、家屋内でも発見例があることから、コウモリ相の調査が進めば、本種の生息記録も増加する可能性がある。ねぐらとなる樹洞のできるような大木は極力残すことが必要である。



執筆者 (清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁)

参考文献・情報

- 1 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 2 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊: 1-21.
写真: 松村澄子提供 (県外撮影)

スミスネズミ *Craseomys smithii* (Thomas, 1905) 齧歯目 キヌゲネズミ科

県カテゴリー	情報不足 (DD)	旧県	2012	-	国	-
--------	-----------	----	------	---	---	---

本種は、本州 (新潟・福島県以南)、四国、九州に分布する。広い分布域をもつが、各地で分断化されており、生息数も多くない。本県では、田辺市と有田川町各2箇所、計1市1町4箇所で生息の記録があるのみであり、護摩壇山から白馬山にかけての白馬山脈に点在している。紀北地域の和泉山脈の大阪府側では本種も記録されているが、和歌山県側では未確認であるのは、高い人工林率によるのかも知れない。



選定理由

護摩壇山一帯は、和歌山県最大のブナ天然林が残存しており、そのことが本種の生息を可能にしていると推測される。しかし近年、増加したニホンジカの採食により林床植生は壊滅的な影響を受けており、草食の本種にとって大きな脅威となっている。最新 (清水, 2021) の記録である有田川町の1箇所は、倒木が折り重なっていることによりシカが侵入できないため、草本植物の生育が認められる場所であった。

護摩壇山一帯では防鹿対策としてネットの設置が試験的に行われているが、動物の生息環境を保護するためには、更に広い範囲に対策を講じることが望まれる。

執筆者 (清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁)

参考文献・情報

- 1 阿部 永 (監). 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 206pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 2 大阪府 (編). 2000. 哺乳類. in 大阪府野生生物目録. 13-15. 大阪.
- 3 清水善吉. 2021. 和歌山県レッドデータブック 2021 追加記録—とくに、ヒメヒミズとスミスネズミの生息環境—. 南紀生物, 63 (2): 159-163.
- 4 清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木 歩・芝田史仁. 2020. 和歌山県における哺乳類の記録. 南紀生物, 62 (2) 別冊: 1-21.
写真: 細田徹治撮影